

ある NGO ワーカーの見たバングラデシュの「災害」

——サイフルの「語り」から（その2）——

高 田 峰 夫

（受付 2011年5月30日）

「その1」概要：

バングラデシュでは災害被害が多発するため、災害関連の報道や研究は非常に多い。しかし、その多くは災害「被害」の報道ないし研究であるため、災害の渦中で苦闘する「人々」の実情は語られることが少ない。被災者については、主に被災直後に限定した形だが、かろうじてその声が報じられることもある。しかし、災害救援に携わる人々の活動とその実情が当事者から語られることはほぼ皆無である。ここでは、災害緊急支援に長いこと従事している1人の NGO ワーカーの語りを通じ、災害救援活動の現場、活動に携わる人々の意識や思考、さらには災害支援から見た NGO や他の機関の活動について、実態を浮かび上がらせることを意図した。同時にこれは新たな形のオーラル・ヒストリー研究でもある。

始めに語り手であるサイフル・イスラムの紹介と彼の NGO 業界での活動経歴を一通り説明した。その後、彼の語りを再現する形で、彼自身が救援活動に関与した1987年の大洪水、1988年の大洪水について話が進んだ³⁷。（以下、承前）

3. 1991年のサイクロン³⁸

1991年のサイクロンだね。当時は Save the Children に移り、チョール（＝砂が堆積して出現した中州や河岸）地域での生活改善活動をするためにジャマルプールにいた。その地域では毎年「洪水」（*banya* この場合は、毎年周期的に生じる「通常の」洪水で、大洪水ではない）

37 本稿は、「ある NGO ワーカーの見たバングラデシュの「災害」——サイフルの「語り」から——（その1）」『広島修大論集』49-2（2009年2月，pp. 33-49）の続編である。本研究は、文部科学省科学研究費基盤研究（A）「アジア・太平洋地域における自然災害への社会対応に関する民族誌的研究」（代表：林勲男）の研究成果の一部を成す。

なお、前回の原稿（その1）執筆時に1987年と1988年の大洪水に関する参考文献を書き落としていたので、補足しておく。2大洪水の概略については AHMAD [1989] 並びに AHMAD ed. [1989] を、1987年大洪水について主に水文学的な観点からの議論としては MIAH [1988] を、それぞれ参照のこと。参考文献一覧は連載最終回に一括掲載予定である。

38 1991年のサイクロンは、同年4月29日夜、同国南東部を襲った大規模なサイクロンであり、約14万人の死者と約1,000万人の被災者を生み、その被害総額はおよそ150億ドルに上ったとされる。バングラデシュ史上でも最悪と呼ばれるサイクロン災害の一つであった。被害の規模が極めて大きかったことから、第1次湾岸戦争から本国に向けて帰還途中であったアメリカ海軍の艦隊が進路を変更して緊急支援活動に従事したことや、イギリス、インド、パキスタン等の諸外国が救援活動を行っ

の被害があり、自分たちはチョールで活動をしていたために、地域の人々の苦勞を見ていた³⁹。また、現地の人々の伝統的な洪水被害軽減方法 (mitigation methods)⁴⁰についても学んでいた。

ある日、サイクロンが起き、ダッカの本部から急遽呼び出されたんだ。行ってみると、(サイクロンの風とサイクロンが巻き起こした津波にも似た高潮襲来により多大な被害が出ていたので) サイクロン被災地域に行って緊急救援活動の責任者をしろ、との命令だった。当時は (Save the Children の組織に災害緊急支援のための) 何のシステムもなく、(支援のための独立した) 部署も何もなかったが、臨時に (サイクロン被災緊急支援担当に) 指名された。この活動では (自分は、そのチームに) 上司が 1 人いる 2 番目のポジションだった⁴¹。本格的な緊急救援活動は初めてで (どうすれば良いのか分からず) 怖かったが仕方ない。活動対象地域に指定されたのはチッタゴン県南部のバンシュカリ郡 (Banshkhali Upazila) だった⁴²。

39 他、日本からは初の海外緊急支援隊が派遣され、その後の海外における災害緊急支援活動にとって画期となったことで知られる。1991年サイクロンの詳細については、TALUKDER, ROY & AHMAD [1992] 参照。また、同国におけるサイクロン全般については、CHOUDHURY, A.M., [2001] 参照。

なお、本文中のカッコ書きの多くは、ベンガル語独特の省略表現の補足、及び筆者と話者のサイフルが以前から知己であることによる相互理解で省略した部分の補足であり、注記は、本文中の記述や補足では読者が理解しがたいと考えられる部分の注釈である。

39 ジャマルプール県はバングラデシュ中北部に位置する。県の西部はジヨムナ川に面しており、また県庁所在地であるジャマルプール市のすぐ北側には旧ブラフマプトラ川 (ジヨムナ川の旧河川流路で、現在は比較的小規模な河川) が流れている。そのため、これらの河川に近い地域では、例年の周期現象としての洪水であっても床上浸水程度の洪水被害が発生する。さらに、それらの土地よりも低いジヨムナ川のチョール地域では、地域一体が水没する事態を免れない。そのため、チョール地域に住む (住まざるを得ない) 住民たちは、毎年のように県内の洪水地域に比べても一層の苦しみを味わう。そのチョール地域を活動範囲としていたサイフルたちは、そうした住民の洪水被害の現状を目の当たりにせざるを得なかった、との事情を語っている。

40 伝統的な洪水被害軽減方法としては、乾季の間に家屋の土台である土盛りをかき上げするのが最も一般的である。また、洪水被害発生後に排水を促すための一時的な水路の掘削、種初等の特殊な保存方法、床上浸水等が発生した場合に水に浸からないよう食料や衣類を屋内の天井から吊るす手法、等も広く見られる。なお、チョール地域における洪水防止ないし土壌浸食防止の在来手法については、SCHMUCK-WIDMANN [2001] に若干の具体例が提示されている。バングラデシュにおける土着の知について一般的な議論としては KHAN ed. [2000] がある。

41 通常、こうしたチームでの活動の場合、トップは本部 (この場合はダッカ) にいて、対外的な連絡調整活動を担当する。サイフルが 2 番目のポジションだったということは、実質的には唯一の現場責任者だったことを意味する。なお、トップの本部での連絡調整活動は、外部には見えない地味な活動であるが、ドナーや上部組織 (Save the Children の場合にはイギリス本部) との連絡調整や援助関連組織 (バングラデシュ政府の関連諸部門や他の緊急援助に関与する国際機関、NGO 等) との連絡調整に始まり、資金配分、資材物資の調達と配送の手配 (いわゆるロジスティック)、現場との細かいやり取り等々、非常に多岐に渡り、極めて重要な役割を果たす。この部分はサイフルの語りにも現れていないことに留意する必要がある。

42 活動地域の指定について。大規模災害が生じた場合、被害地域が広く、かつ被災者が多数に上る。また、被害規模が大きくなるのに応じて、被災者に対する緊急支援活動に関与する支援組織も多数になる。非常に大規模な災害の場合には、当該国 (この場合はバングラデシュ) 政府から主要先進諸国政府、当該国の関係省庁、現地行政組織、さらには国際機関 (国連開発計画 [UNDP], 等々) から国際 NGO、現地の NGO、現地住民組織等々まで、多くの組織が活動することになる。しかし、

(緊急救援活動に使用するための) 大金を持たされて現地にバスで向かったが、ミルショライ (Mirsarai) 辺りから急にものすごく暑くて (空気が) ベタベタしだしたことを記憶している⁴³。(チッタゴン市を過ぎて) 現地に行く途中にも被害の大きさにパニックになった人々が怒っていたり、火が燃えた跡があり⁴⁴、そのためにさらに暑かった。

何とか現地 (バシュカリ) につくと、辺りは一面 (サイクロンが引き起こした高潮に巻き込まれて溺死した) 死体だらけだった。大金 (= 救援活動のための資金) を持っていて危ないので、まずその安全を確保することが必要だった⁴⁵。軍も救援活動をするために派遣されてきていて、現地のカレッジの校舎を仮宿舎にし、その 1 階を占拠していたので、軍に交渉して、同じ建物の 2 階に場所を確保した⁴⁶。自分たちが担当したのは医療と衛生活動だ。す

それらの組織が無秩序に活動を行うことは被災地で混乱を招くばかりでなく、特定の被災地への救援集中や偏り、別の被災地の救援活動からの置き去り等を招く他、特定タイプの支援活動にばかり支援組織が集中すると逆に当該国全体にまで悪影響を及ぼしかねない。そのため、災害発生直後に、被災地ではなく中央 (この場合はダッカ) で救援活動に名乗りを挙げた主要機関の代表者が緊急支援会合を開催し、支援活動地域、対象者、活動の種類、等々について大まかな割り振り調整を行うのが一般的である。ここで語られている 1991 年サイクロンの場合、この種の調整の結果、Save the Children にはバシュカリ郡が活動対象地域として割り振られたのである。ただし、この調整は災害発生直後に発生現場から遠く離れた場 (主に首都等) でなされるため、現地に入ってみると割り振りが不適当であると判明することもある。その場合には、現地で災害対策本部が立ち上げられた後、改めて調整や割り振りがなされることになる。なお、これはあくまで緊急支援活動に関する調整である。緊急支援活動期が終了した後は、中長期的な生活再建支援に向け改めて別の調整がなされることになるが、一般的に言えば、こちらは緊急支援活動ほどの適切な調整がなされていないようである。

- 43 ミルショライはチッタゴン県北端でチッタゴン市から北に 70 km ほどの距離に位置する郡。ダッカからチッタゴンに向かうと、初めのうちは内陸部を通過するが、ちょうどミルショライ付近から国道はほぼ海外線と並行して走るようになる。その地形の変化が彼の経験に重なると考えられる。
- 44 サイクロンの高潮被災後に火事になるのは不思議なようだが、かまどで薪による煮炊きをし、村部で一般的な家屋は柱が木材、屋根が茅葺きであるため、サイクロンの波風の衝撃で家が燃え上がり、それが周囲に延焼する可能性は大きい。事実、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では、津波襲来の直後に気仙沼市で大規模な火災が発生したのを我々は眼にしたばかりである。これに加えてバングラデシュの場合には、被災して自棄になった人々が放火した可能性も否定できない。なぜなら、怒りや抗議の表現方法の一つとしてバングラデシュでは放火が採用されるからである。この点は、交通事故や列車事故の現場で事故に怒った被害者の親族や友人たちが通りがかりの車に対し放火する例などを TV や新聞報道等でしばしば確認することができる。
- 45 一般に大規模災害の緊急支援活動の場合、大きな被災現場は都市から離れた村部である。元々こうした場所には銀行の支店もない。その上、現場では様々なインフラが破壊されていて、銀行の支店がある近場の市場町や小都市への往来にも苦勞するのが普通である。そのため、緊急支援活動では、現地 (通常は被災地域の小さなバザール等) での当座の物品の調達、活動を手伝う人々に対する日当の支払い、さらには自分たちの宿泊・食事・交通 (自動車の燃料代) 等々を含め、全て現金で決済する必要が生ずる。こうした支払いのために、活動の当初には一定額の現金を持参することが不可欠なのである。
- 46 日本で「火事場泥棒」があるように、災害被災地ではしばしば無法状態が生じるために、暴力や犯罪被害が多発する。そのため、災害支援活動に従事するワーカー本人たちの身の安全と共に、救援活動資金の安全確保が重要な問題になる。彼は救援活動に派遣された軍の仮宿舎に活動拠点を置くことで、身体と資金の両方の安全を確保したのである。

でに多数の NGO が現地に来ていたが、(まだ救援)活動は活発とは言えなかった。ウボジェラ(郡に相当)にはコーディネーターに管区長(Divisional Commissioner)⁴⁷がチーフ(現地緊急支援活動全体の統括係官)として(政府から)派遣されてきており、彼を中心に毎日夕方ミーティングが開かれた。参加者は政府関係者、軍関係者、NGO 関係者等、救援活動に携わる全ての機関の代表だった。国と国際機関から感染症を発生させないために死体処理が(緊急の)課題との連絡が現地に入っており、また自分もそれが最優先だと考えたから、そこ(ミーティングの席上)で死体の埋葬を提案し承認された。ダッカの上司も承認し、軍関係にも連絡を取ってくれた。

早速、現地の人を連日約1,500人(ほど)使って埋葬作業を始めた。ただし、遺体埋葬は普通ならドムやムチ等の人々がする仕事で⁴⁸、誰もなかなかやりたがらない。(そこで)軍(人)が、この仕事は必要だからさっさとやれ、と人々を脅しつけて、参加者を確保してくれた。その点で、軍の支援は助けになった。この場合、これ(=軍による遺体埋葬作業への参加強制)はやむを得なかったし、必要だったと思う。(埋葬)場所を選んでいない場合ではなかったので、ともかく空いている場所なら、道端だろうと、池や水路の端だろうとあらゆる場所に穴を掘って埋めた⁴⁹。場所が足りないために、穴を深く掘り、一つの穴に3~5人の遺体をまとめて埋めるが多かった。ただし、男性と女性だけは別々に埋める、唯一これだけは厳しく守った⁵⁰。遺体は(サイクロンの高潮による)海水に浸かったためか、不思議なことにサイクロンの7・8日後になっても腐らなかったから、男女はすぐに分かったんだ。ヒンドゥーなどは分かれば(ムスリムとは)別に埋めた⁵¹。作業を手伝う人には上司の

47 管区 (division) はバングラデシュ全土に6つある、一種の道州に近い組織。ここでは、そのうちのチッタゴン管区長のこと。管区長は(国家)副次官(Deputy Secretary)相当レベルの高級官僚。

48 ドムは本来、ヒンドゥーの火葬等に従事するアウト・カーストの人々であり、ムチは主にムスリムの土葬や死体処理等に従事する人々を指示することが多いが、地域などによって用語法は異なる。ただし、この文脈ではほとんど区別なく使っている。

49 バングラデシュの村部では、墓地は集落内外(主にモスジッド等の近く)に小規模に分布する。それ以外は、家屋と池と果樹とがセットになった屋敷地と農地(主に水田)が一面に広がり、間に竹林が散在する程度で、ほとんど空き地がない。ムスリムの場合、イスラームの教義から土葬が基本であるが、今回は一度に多数の犠牲者が発生したため、遺体を土葬しようにも、それだけの埋葬地がなかった。そのため、わずかな未利用地である道端、池や水路の端を臨時的埋葬地として使用する以外に方法はなかったのである。

50 住民の圧倒的多数はムスリムである。イスラームでは、正式な婚姻関係にある男女を除き、パルダ(男女の隔離原則)が重視されるため、その規範だけは守った、ということ。こうしたことを注意しないと、たとえ善意による災害救援活動であっても、現地で直後に、または後々まで、厳しく批判されかねない。

51 人々の宗教感情を考慮し、このように別葬を実施したのであろうが、逆に言えば、それほどまで日常的に宗教コミュニティー間では社会的な距離がある、との証左でもある。ヒンドゥー教徒の場合には火葬されるのが普通だが、病死者や災害による不慮の死者は土葬することも多い。インドでは大河に近い場合には水葬もあるようだ。なお、ヒンドゥー教徒以外に、この地域には若干の「ボルア」と呼ばれるベンガル人仏教徒もいる。そのため、彼は「ヒンドゥーなど」と表現している。

許可を得て1人当日当を100タカ出した。(これは,)とにかく早く(埋葬作業を)終わらせるべきだと考えたためと、手伝う人々も被災者であり、彼等も生活再開のために現金が必要だと考えたからだ。(作業の)監督には軍人の協力を仰ぎ、支払い等の際にも(軍人に監視してもらい)混乱が起きないようにした。ひたすら朝から晩まで遺体の埋葬を続け、3日間で約29,000人の遺体を埋葬し、その地域の遺体埋葬を完了したんだ。

手伝った人々に(現)金を払ったことについては、そんなことをすると金がない我々は活動ができない、そもそも(遺体の埋葬は)通常ならドムなどがする仕事で、(彼らの報酬なら)せいぜい60・70タカの日当なのに⁵²、なぜ100タカも払うんだ、と例のミーティングの席で他の NGO (の代表者)から抗議を受けた⁵³。しかし、(今回は)緊急事態である上に、人々には早く日常の生活に復帰するためにも現金、(すなわち)購買力が必要だと(私=サイフルが)判断したためと、現地の市場での取り引き、商品流通が早く再開されて通常の状態に戻すことが必要とも考えたため、あえて協力者に現金配布を提案したんだ。また、そのためには労働力を買叩くのではなく、逆に適正な日当を支払うことこそが必要なのだ、とも考えた。

例えばこんなことがあったよ。(食料等を買う資金が早急に必要のため)大きなニワトリを持った(被災者の農家の)男の人が来て「何とか買ってくれ」という。他の NGO の人々はそれを60~70タカで買った。自分の所にも来て「あなたの好きなように買ってくれ」⁵⁴と言う。そこで「サイクロン前ならこの鶏はいくらだったんだ」と尋ねると、(男は)「少なくとも80タカはした」と言うから、80タカ出して買った。つまり、現金が必要なために手持ちの資産を安く買叩かれ、そのために通常の生活に戻るのがさらに難しくなってしまうし、他の(サイフルを批判した) NGO の人々はそれを(=買叩くこと、及びそれによって被災

52 こうした低賃金で人の嫌がる仕事を押し付けているところに、明らかな差別が垣間見える。ただし、バングラデシュの、特にムスリムの場合には、ヒンドゥーの場合のようにドムたちがカーストのカテゴリー化していると言えるかどうか、やや微妙である。

53 このような緊急支援の場合でも、NGO 間では救援活動の方法をめぐる争いが耐えない。一部には、ここで触れられているように、活動資金が豊富な外国系 NGO と資金的余力に乏しい国内の地方 NGO の経済力の差が争いの原因になっている。また、バングラデシュの場合には NGO が巨大な業界を形成し、業界内部で活動実績を巡り企業間競争にも劣らぬ激しい競争を行っているため、不平等な条件による競争を強いられたために、他の団体に「業績」を奪われた、との不満があった可能性も高い。実際問題として、各 NGO はこうした緊急支援活動も含めた様々な活動の「実績」を誇示することで外部(外国のドナー NGO や国際機関等)から資金調達をするのが一般的である。そのため、一部の NGO に目覚ましい実績を上げられると、他の NGO が翌年次以降の資金調達競争で不利になる可能性が高まる。したがって、こうした不平等な競争への不満表明には切実なものがある。

54 バングラデシュでは、あるサービスやモノの値を質すと、しばしば「あなたのお好きなように」(*apnar iccha mato*)または「あなたの喜ばしいように」(*apnar khushi mato*)との言葉が売り手から返ってくる。これは、自分の社会的劣位性を自覚し、相手の社会的優位性を認めた上で、相手に対し寛大な振る舞い(この場合で言えば相場ないしそれ以上の支払い)を求める表現と言えよう。つまりは一種の駆け引きの表現である。

者の日常生活再開が困難になることを) 何とも思っていなかった⁵⁵。自分は、むしろサイクロン以前の生活を取り戻すためにも現金等(現金と適正な価格による市場の円滑な運営)が欠かせないと考えて100タカの日当支払いを提案し、上司もそれを承認した。実際に遺体埋葬の活動と対価の現金配布は多くの人から高く評価されたから、私は(当該 NGO の人の)批判を受け入れなかったよ。

人間の遺体埋葬に続いて、次に牛やヤギの死骸埋葬を行った。これは合計7,000~8,000頭だったと思う。(この活動に対しても人々には)同じように日当を支払った。これにより、遺体や死骸の腐敗による悪臭や汚染、それによる健康被害等とはりあえず防止できた。

その後、(埋葬作業が終了したので、次の救援活動について考えをめぐらし)、今度は被災者にシェルターが必要だと考えた。ただし、大規模なシェルターは困難だ。そこで、被災者に即製小屋作りに必要な材料を配布し、それを使って彼ら自身の手で小屋の建設をしてもらえば、それがシェルターになると考えた。すぐにトタン、竹等の建材を(調達して、それを被災者に)提供した。1家族(*paribar*, ポリバル)⁵⁶ごとに、柱用として竹、太い竹なら2本、細い竹は3本と⁵⁷、屋根材としてトタン板72フィート分、(すなわち、9ftの長さのトタン板)8枚、を配布した。現地ではほぼ95%程度の家が壊れていた。そのうち比較的豊かな人を除き、残りの多く(の家族)に建材を提供した。配布場所には学校の敷地などを選び、そこで配布を実施したが、竹だけでも大型トラック100台分位あったよ⁵⁸。また、建材を運ぶにもウボジラ中央⁵⁹から配布場所まで道がなかった。そこで、水路を使い、満潮時にウボジラ中央から建材をイカダにして(水路に)流し、(引き潮の際に)潮が引くに連れて配給場

55 注54で記した駆け引きの表現としての「あなたの好きなように」だが、必ずしもそれが有効とは限らない。相手に交渉能力がなかったり、売り手がこの事例のような災害被害者で他の選択肢(例えば、売ることを拒否する等)がないことを見通している場合、買い手は自らの絶対的な優位性を背景に、売り手の言葉を逆手に取り、まさしく自分の「好きな」(端的に言えば安い)値段で買い叩くのである。実際、この場合、他の NGO の人びとは被災者に対してその種の買い叩きを行ったことがサイフルの語りから明らかになる。これもバングラデシュにおける災害被災地の厳しい現実である。多くの先進国、とりわけ日本では、しばしば NGO で働く人々に対して使命感に満ちた高潔な人格等を期待しがちだが、バングラデシュのような途上国では、その種の期待は的外れであることが例証されている。

56 厳密に言えば「ポリバル」は家族と必ずしも同じではない。ポリバルについて、詳細な議論は原[1969]を始めとする原忠彦の一連の議論を参照されたい。

57 バングラデシュの竹は主に孟宗竹で、なおかつ非常に大きいのが特徴である。「太い」と表現されるものの場合、通常、長さ10m以上、根に近い部分の太さは10数cm以上あり、「細い」とされているものでさえ、長さ5m以上、太さ10cm程度である。したがって、小型の小屋の骨組みを作るには十分な量であろう。

58 バングラデシュの場合、当時、大型のトラックといえば、Bedford社製のシャーシに木造のボディを据え付けた5t車が一般的であった。ただし、車体にベンガル語表記で5tと積載量が記されていたものの、その倍程度の過積載をすることが普通に行われていたから、実際には恐らく10t車100台分程度の量の竹が調達・配布されたと考えられる。

59 この場合、実際には郡の役所がある場所のこと。

所まで運ぶという手立てを考えた。

被災者には医療と保健衛生（関連の情報・備品・サービス等）を提供し、清潔な飲料水確保のために深井戸を設置した。井戸は、“Deep Set”と呼ばれる特殊なもので、手押しポンプだがパイプの長さは800～1,000フィート（約 300 m 前後）もある⁶⁰。これで確実に清潔な飲料水を確保できる。井戸は合計約100本掘った。

現地で（の活動中、私の）印象に残っているのは何よりも母の偉大さだね。（自分自身と共に子供を避難させようとして）子どもを抱えたまま死んだ女性の遺体は多数見たが、子どもを抱えた男性は1体も見なかった。また、臨月の妻が出産しそうだという知らせを受け、それと相前後して（サイクロンによる）高潮被害を知り、仕事先のチッタゴンから戻ってきた男がいた。ところが、男は被害のひどさを見て怖がり、ウボジラ中央から数キロ先の（自分の）家の方に行こうとしないまま、自分（サイフル）たちが現地到着するまで2日間、そこで留まっていた。その姿にはあきれ、あまりのことに心底怒って、「さっさと行け！」と怒鳴ってしまった。幸いにも女性は無事出産した上、新生児も女性も助かっていた。義父（男の父）がサイクロン接近の知らせを聞き、まず貴重品をトランクに入れて紐で縛り、盗まれないように池の中に沈めて紐の端を近くの木の下に縛り付けた⁶¹。その上で、女性と子供と共に屋根の上に上り、その家は壊れなかったために、かろうじて難を逃れたのだという。潮が引いた後、彼らは近くの学校に避難していて無事だったようだ。ともかく、女性は立派だが、（普段）偉そうなことばかり言っている男性はダメだ。つくづくそれが分かったよ⁶²。

60 通常の手押しポンプは、地下水のうち、最も地表に近い層（地下水第1層）から汲み上げる。バングラデシュの場合、一般に低地かつ河口デルタ等のため地下水資源が豊富であり、地下水第1層はせいぜい数 m の深さしかない。そのため、汲み上げが容易な反面、地表や地表水の細菌・汚濁が混入する事態が生じがちである。それを避けて確実に清潔な水を得るためには、さらに地層を掘り下げ地下水第2層ないし第3層まで到達し、そこから水を汲み上げることが不可欠になる。しかし、地下水第2層以下の地下水層はかなり深いので、通常の手押しポンプでは汲み上げ不可能であり、一般的には電動ないしディーゼルのポンプが用いられる。ところが、被災地では燃料や電気が手に入らない。そこで、サイフルたちは特殊な手押しポンプを導入することで清潔な飲み水の確保を行ったのである。

61 トランクとは、恐らくブリキ製の衣装ケース型でカギがかけられるタイプのものであろう。バングラデシュの農村部では、バザール等でジャライ・ワラと呼ばれるブリキ職人が、バケツやタライ等と共に、こうしたトランクを製造販売している。農村部の人びとは、このトランクに貴重品（晴れ着のサリーやシャツ、貴金属類、卒業証書や土地関係書類等）を保管することが一般的である。そのトランクを池に沈めたのは、こうした災害時を狙って盗難事件が多発するため、盗賊の目に貴重品の在り処を見え難くするためである。

62 バングラデシュでは、「母」に特別な重みを持たせる傾向が顕著である。特にムスリムの場合、男性たちは「妻の代わりはいても、母の代わりはない」等の表現で母に対する特別な思いを表現することが間々ある。この段落の語りのテーマは基本的に「女性の偉大さ」であるにもかかわらず、この段落の冒頭で「母の偉大さ」と集約されていることも、こうした文化的背景を考えれば理解し易いであろう。なお、バングラデシュに限らず、また、宗教の違いを超えて、広く南アジアでは母を特別視する傾向が強い。

活動中は、活動状況と現地の状況把握のために、上司である部長 (Director) が毎週ダッカから視察に来た。そのたびに (活動の進捗状況の) 報告と (その後の活動についての) 相談をした。(緊急救援活動を実施したのは) 12人の小さなチームだったが、良い活動をできたと思うね。

こうして緊急救援活動を終えたんだ。約 2 ヶ月かかった。ダッカに戻ったら、身体中が陽に焼けて皮膚はボロボロになり真っ黒になった上に、疲れと緊張で痩せてしまい、まるで別人のようになったので見分けがつかず、家族や友人に驚かれた⁶³。チームの皆が同じような状態だったね。上司は (我々の救援) 活動を高く評価し、ほうびに 1 人 5,000 タカのボーナスと表彰状 (appreciation letter) をくれた⁶⁴。また、この時の活動が評価されて、このサイクロンをきっかけに緊急支援チームのメンバーに任命されたんだよ。このチームは以前からあったが、ほとんど活動していなかったため、(自分=サイフルは) 急いで活動のガイドライン、報告 (report) システム、作業管理 (Operation Management) 等を策定した。通常の活動とこの緊急支援チームの活動が評価され、1994年には (Save the Children, Bangladesh の) 副 (Deputy) プロジェクト・マネージャーに昇格した。

4. ロヒンガ難民流入⁶⁵

1992年⁶⁶のロヒンガ難民流事件だね。(流入した難民の数は) 26~27万人だった。3月の終

- 63 日本ではバングラデシュを初めとする南アジア地域の人びとは一様に「黒い」という印象が強い。しかし、実際には人びとの肌の色は非常に多様である。また、一般的には色白の方が社会的な評価が高く、なおかつわずかな色の違いも区別するほど、人びとの肌の色に対する関心は高い。サイフルは元々が現地基準ではそれほど色黒ではなかった。その彼が日に焼けて黒くなっていたことから、周囲の人びとは驚いたのであり、そうした周囲の反応が彼には強く印象に残っているのであろう。
- 64 この当時の通貨レートで 1 タカ = 約 3.2~3.5 円程度。ただし、当時はバングラデシュ全体の物価水準や勤め人の給与水準が低かったことから、5,000 タカはサイフルの月給相当ないしはそれ以上の額であったと推定される。
- 65 ロヒンガ (Rohingya, ロヒンギヤ, ロヒンジャーとも) は、バングラデシュ南東部コックスバザール (Cox's Bazar) 県と国境を接するビルマ (ミャンマー) 西部のアラカン (ヤカイン [Rakhine]) 州のムスリム集団の一つであり、ビルマ国内では最大のムスリム集団とされる。この難民流入 (ビルマ側から見れば、流出) 問題発生 of の直接のきっかけは 1990 年のビルマ総選挙だった。ロヒンガの人びとはアウンサンスーチーに率いられた国民民主連盟 (the National League of Democracy) の候補者を支持し、アラカン州では同連盟の候補者が全 23 議席を獲得する大勝だった。ところが、その後、ビルマ軍が事実上のクーデターにより政権奪取し、軍政になる。軍政側は同連盟と民主化支持者たちを徹底的に弾圧した。このあおりを受けた形で、アラカン州のロヒンガは軍政と地元 of の非ムスリム住民から激しい圧迫を受け、1991 年 6 月よりバングラデシュ側に避難を開始し、その多くはバングラデシュ国内の難民キャンプで難民生活となった。1992 年 4 月にバングラデシュ政府とビルマ軍政との間で送還に関する合意が得られ、一部は送還されたものの、送還作業は遅々として進まず、逆に、1997 年には再び大きな衝突が発生し、再度バングラデシュ側に難民が流入。現在でもなお多数がバングラデシュ国内の難民キャンプ及び周辺地域からチッタゴン市内外で暮している。その数は、推定で 20 万人前後とされるが、正確な数字は不明である。

わり頃、(ビルマのアラカン州から) 大量の難民がバングラデシュ側に流入しているとの知らせが(伝わって) 来た。以前に緊急支援チームのシニア・メンバー (No.2 だが、実質的には現地での責任者) に指名されていたので、(緊急救援活動を実施するため) すぐに現地に向かった。その前(自分が現地に到着する前)に Save the Children の2人のシニア(当時のサイフルよりも上級かつ前任の職員)がテクナフ (Teknaf)⁶⁷の2つのホテルを予約で借り上げる手配をしてくれたので、そこにチームの宿泊所と本部を置いたんだ。

現地(テクナフ市郊外のナフ川沿いの場所)に行ってみると、バングラデシュ側に上がる難民は、上陸場所を規制され、一つの「入国地点」(Entry Point)で登録を済ませないと入国

ロヒンガについて、簡略な紹介は MOHIUDDIN [2003] を、概略は BERLIE [2008: 47-63], YEGAR [2002: 17-71] を、難民流入後を中心とする最新の状況については AHMED ed. [2010] を、それぞれ参照のこと。なお、AHMED ed. [2010] には、難民自身による語り的事例として多数収載されており、非常に貴重である。

ロヒンガについて注意すべきは、ロヒンガや彼らを後押しするムスリム側の主張と、ビルマ政府や非ムスリム側の主張が、人口等の基本的数値を含め、あらゆる点で大きく異なる点である。そのため、両者間で比較的客観的な記述・数字を見出すことは困難である。この問題については、非常に複雑な事情があり、ここで簡単に記述することが出来ない。なお、齊藤 [2010] によれば、アラカン州のムスリムは政府公認のカマンと、政府非公認のロヒンガの2集団が主なものであり、それ以外に、「インド系」ムスリムとバマー・ムスリムがいるとされる。しかし、実際問題として、それらの集団を厳密に区別することは難しい、との指摘もある [YEGAR 2002: 25]。

ちなみに、ビルマ軍政がロヒンガを圧迫しているのは間違いないが、この問題にはそれだけには留まらない側面があることにも注意する必要がある。例えば、ネット版の“The Irrawaddy”, 2011年3月24日付け記事 (KHIN OO THAR, “Muslims Arrested in Arakan State Accused of Taliban Ties”) は、アラカン州でロヒンガの一部の人びとがタリバンと関係してテロを計画した疑いにより拘束され取調べを受けている、と報じる。事件自体は、恐らく軍政側の一方的な迫害の事例であると推定される。ただし、ここでは別の点、すなわち同記事に寄せられたコメントの内容に注目したい。当日に寄せられたコメント全9件中、ロヒンガに同情するものは2件のみ。かなり皮肉に見るもの1件、残り6件は明らかなロヒンガ批判であった。しかも、その中には明確に軍政を批判する立場のものが含まれている。つまり、単純に軍政がロヒンガを抑圧している、という構図ではなく、むしろ軍政側と共に反軍政側(いわゆる民主化勢力)の多くもロヒンガ問題に関しては反ロヒンガ姿勢が鮮明なのである。そもそも同誌は反軍政が基本姿勢であり、だからこそこうした「事件」を軍政による迫害のニュースとして報じていることにも留意したい。にもかかわらず、その読者たち(=基本的には民主化支持のビルマ人やその他の非ビルマ系諸民族の人びとで、なおかつ英語を読むインテリたち)がロヒンガには極めて批判的であるという事実の持つ意味は、その是非はさておき、極めて重い。1991年の難民流入事件と、現在まで続くロヒンガ問題は、単なる軍政の横暴という見方でなく、むしろその背景に、こうしたビルマ国内でのロヒンガの位置づけをめぐる争いを考えるべきであろう。

66 ここでサイフルは1992年としているが、前注に記す概要から考えれば、彼の記憶違いで、実際には1991年であった可能性も否定できない。

67 コックスバザール市からバスで2時間ほど南に下ったバングラデシュ最南端の地方都市。国境でもあるナフ川を挟み、対岸のビルマのアラカン州に面している。ちなみにアジア・ハイウェイの南ルートは、ダッカからチッタゴン、コックスバザール、テクナフ、アラカン州のアクャブ(シットウエ)、ラングーン(ヤンゴン)へと続く。ただし、テクナフとアクャブの間に橋はなく、両地域(バングラデシュとビルマ両国)を行き来する人は、小型の渡し舟を使う。2011年4月現在、外国人にこのルートは開放されていない。

できないようになっていた。当時はちょうどラマダーンの時期だったと思う⁶⁸。その後も難民は続々と来たが、BDR⁶⁹や軍と政府がなかなか受け入れなかったので、入国地点に入れず、(ビルマ側から船でナフ川を渡ってきてても)着岸もできずに、ずっとナフ川の水上で船上生活する人々が多数いた。その後、(難民の窮状を認め、難民入国妨害を批判する)国際的圧力があつたためか、BDR や軍は引き揚げた。入国した難民たちは、しかし登録だけされたものの、全て(行き場も無く)野原にそのまま座り込んでいた。そこで、まず何よりもシェルターが必要だと考え、ダッカから急遽ビニールシートを(調達し、現場に)持ち込んだ。そのロール 1 本を 3 つに切り、各世帯にそれを配布した。彼らはそれで周辺の木や枝を切り、簡単な骨組みの応急の小屋掛けを自分たちで作った。また、ハシカが流行りかけていたので、ハシカ・ワクチンを取り寄せ、3 日間で合計 84,000 人に実施した。ちなみに、このときの様子を外国の TV チームが取材して報道したよ。彼等(難民たち)の中にはビルマ軍から暴力を受けた人が多く、身体にヒドイ傷があることからそれを(=暴行被害の事実を)実際に確認した。重傷で何ヶ月も寝込んでいた男性もいたね。

自分たちは子供たちをターゲットにした栄養補給に活動の焦点を当てた。栄養補助給食センター(Supplementary Feeding Center, SFC) 4 ヶ所と治療給食センター(Therapeutic Feeding Center, TFC) 2 ヶ所を設置した。1 人 1 人子供を見て状態を確認し、症状が重いと判断した子供は TFC に、栄養状態が悪いだけでそれほど深刻でない判断した子供は SFC に送った。TFC の中(の一角)には、別に下痢コーナーを設け、下痢疾患で重症の子供たちはそこで治療を受けさせた。TFC で治療を受け、症状が好転した子供は SFC に送られる。SFC では食事を作って子供たちに食べさせ、大体体調が改善して家族の下に返しても大丈夫と(自分=サイフルたちが)判断すると退院だ。通常は約 1 週間で家族の下に戻った。水はコックスバザールからトラックにタンクを積んで運んだ。当時は国連難民高等弁務官事務所(UHCR)もこの種のセンターを設置していた。この時は政府や各 NGO、国連関係などの連携が非常に良かったな。主に政府と UNHCR が連携して保安林の中に難民キャンプを設置

68 ラマダーンはイスラム暦(ヒジュラ暦)第 9 月。この月にはムスリムは夜明けから日没まで断食をすることが義務とされる。ヒジュラ暦は太陰暦であるため、毎年 11 日ほど前に進行する。そのため、ラマダーンを西暦で確定することは出来ないが、1991 年のラマダーン月は、ラマダーン明けのイード(Id al-Fitr, or Eid ul-Fitr)が同年 4 月 16 日であったことから、3 月中旬から 4 月中旬であったはずである。サイフルは前回記した通り敬虔なムスリムであるため、ラマダーン月には断食を実践する。しかし、バングラデシュで 3 月半ばから 4 月半ばは年間で最も暑くなる時期に重なる。その時期に屋外での活動中であっても日中には一切の飲食をしないと決意し、それを実践する(一滴の水も飲まない)には、大変な意思と苦痛を耐える精神力及び体力を要する。救援活動に忙しく立ち働く間も断食を厳格に守っていたため、身体的・精神的苦痛と共に記憶が強く残っていると推測される。

69 Bangladesh Rifles の略称で国境警備隊のこと。ただし、2009 年 2 月にダッカの本部駐屯地を始め各所で、軍との待遇格差に対する不満等から大規模な反乱を起こし、多数の死傷者が発生したため、その後、改組され、組織名も 2010 年より Border Guard Bangladesh に変更されている。

した。各キャンプには長として政府が国家副次官（Deputy Secretary, DS）を派遣して自治（難民たちが自分たちでキャンプの治安維持・運営等を行う）の指導に当らせていた。

Save the Children が担当したのはドンドミーヤ（Dongdomiya）1 と同 2 の 2 つのキャンプだった⁷⁰。それぞれ人口は15,000人～20,000人だった。当初は続々とジャーナリストや政府関係者がやって来て、勝手にキャンプの中に入り込み、活動の妨げになったので、ジャーナリストは極力排除して中に入れさせないようにした。特に外国のジャーナリストが勝手に写真を取りまくり、それを批判すると怒る。当時の現場責任者（Field Director, Save the Children 本部から派遣された責任者で英国人）がスーダンの難民キャンプの活動経験者で⁷¹、そこでは自称ジャーナリストが被害の写真を取りまくり、その写真を使って資金集めをした挙句に、ほとんどを自分たちのために使ってしまった事実を知っていたので、その経験からジャーナリストは立ち入り禁止にしたんだ⁷²。また政府関係者（のキャンプへの立ち入り）にも制約を設けた⁷³。NGO 間では責任を分担し、Oxfam⁷⁴が給水を担当した。彼らは（川の支流の上流部分に）簡易ダムを作り、パイプで水をキャンプまで引いて水を配布した⁷⁵。Save the Children は母子保健（Mother and Child Health, MCH）を担当した。ちなみに、（現地で開催した中で）この MCH を SFC/TFC と共にやれば良い結果が出ることが分かった。（MCH としては）3名の医師を配置し、栄養面に集中して活動した。TFC や SFC では難民の女性をトレーニングして調理に当らせたが、その中にラングーン（ヤンゴン）で NGO 活動を経験した女性がいて大変助かった。子供たちは栄養状態が改善すると家に帰らせるのだが、（その後の状況を）視察に行くと、（家で）子供たちはドライ・フードばかり食べさせられていて⁷⁶、（それに飽きていて）私たちを見ると寄って来て私たちのズボンやシャツをつかんで離

70 ここでは AHMED ed. [2010] で最も多用されている表記に従い、キャンプの名称を Dongdomiya と記すが、同じ文献中でも異なる表記が散見されるため、確実ではない。

71 サイフルは詳しく説明しなかったが、この語りから、大規模な難民発生のような緊急事態にはイギリスの Save the Children 本部から、この種の緊急支援活動に習熟した専門家が派遣され、現場での活動の立ち上げを指導していることが垣間見られる。ただし、それは恐らく短期間に限られ、その後は現地団体の手で現場の活動が継続的に実施されるのであろう。

72 難民の悲惨な状況を食い物にする、この種のジャーナリストは、世界的に数が多い。彼らにとっては悲惨な光景であればあるほど見る側にアピールするため、争うようにして悲惨な場面を探し回り、ピン・ポイントでそうした場面を切り取る競争をする。日本でも災害現場等でマスコミの過剰取材が問題になるが、世界の難民キャンプでの争いは、そうしたレベルをはるかに超えたもので、救援活動の大きな障害になっていることを、この語りは例証している。なお、スーダンの例ではあるが、「あるカメラマンの死」[藤原 2010: 11-30] は、このような難民報道の実態の一端を証言しているので参考にされたい。

73 これは、政府関係者が勝手に立ち入り、サイフルたちや難民代表たちの指示・行動とは別の指示を出して、現場を混乱させる事態を回避するため。

74 イギリスに本部を置く NGO で、この場合は、そのバングラデシュ支部。

75 日本の簡易水道とほぼ同じ方式。

76 バングラデシュの一般的状況から、この場合のドライ・フードとは、恐らく「ムリ」（米を炒って）

さない。SFC での食事が良くて戻りたかったのだと思う。そこで、配給食料でもできる料理を考え、料理教室を開催して母親たちにキチュリ⁷⁷など子供たちが食べやすい料理をするように教えた。

キャンプでは沢山の子供が生まれた。ロヒンガの間では迷信も強く⁷⁸、また全く避妊もし



ロヒンガ難民キャンプを背景に緊急救援活動時のサイフル氏

ないので、そのためだった。そこで急遽、助産婦 (*Dai*) トレーニングを開催した⁷⁹。キャンプ (の中) はものすごく暑く、(建物が) 非常に密集していた。ダッカのスラムよりもずっと多くの人が狭いところにいたから、風も通らない。その結果、(衛生健康面で) 問題続出になった。ともかく (参加 NGO 等が) 分業で緊急活動をするうちに、徐々にキャンプの数も増え、状況も少しずつ改善されて、緊急事態は終了した。

膨れさせたもの) ない「チラ」(小麦を茹でた状態で平らに潰し、それを乾燥させたもの)、または地方のベーカリーが焼く安物のビスケット等を指すと思われる。

77 キチュリには様々な種類があるが、この場合は恐らく「ダル」と呼ばれるレンズマメや野菜等を入れた雑炊。ただし、後にサイフルに確認したところ、煮炊きをするには薪が必要だが、キャンプの出入りは制限されていてキャンプ周辺の森林で枯れ木や枯れ枝を集めることも難しい上、薪を買うには現金が必要なため、実際にはお湯を沸かすことさえも限度がある状態だったという。したがって、こうした指導がどこまで役立ったのかは、やや疑問である。

78 これは、一部の保守派ムスリムや教育のない人々の間で、避妊はアッラーが定める運命を人間が勝手に捻じ曲げることであり非イスラーム的行為だ、とする考え方が広まっている事態を指しているのであろう。

79 バングラデシュの村部では、伝統的に *Dai* と呼ばれる職業的な助産婦がいる。ここではそれと異なり、難民女性たちの中である程度の教育ないし理解力のある人を選び、彼女たちに妊娠出産に関連する基本的な知識と技能を授ける訓練を実施したのである。

テクナフにはバングラデシュ国際下痢疾患調査センター (ICDDR,B)⁸⁰が大きな土地を持っている。本来は各種疫学調査関連研究のための施設だが、広大な土地だ。活動が長期化しそうな見通しだったので、許可を得て、その(土地の)一部を借り受け、竹と木でできた簡単な家建て、ホテルを引き払ってそこを職員宿舎 (staff quarter) にした。そこ(宿舎)でその後も毎日600~700人の子供に食事提供したよ。その頃になると多数の NGO が続々と(救援活動に加わって)来たので、それらの NGO 間での連絡に会議を開催した。また、各キャンプ長の下で、そのキャンプで活動する NGO の調整会議が開かれた。1年ほどしてから AMDA⁸¹も来たが、彼等の活動はあまり有効ではなかったな。彼らは、よそ(=恐らく、以前に別の災害支援を行った場所)で実施したことがあるのと同じ寄生虫駆除だけをしていたが、そもそも栄養状態や健康状態全般が良くならなければそれだけではどうにもならないよ。確か1992年末か1993年初めの頃だったと思う⁸²。

ロヒンガは非常に素直な、人の言うことを聞く人々だった。私はチッタゴン大学で学んだせいでチッタゴン方言を話せたため⁸³、彼等との意思疎通は楽だったし、彼等も私には色々な相談を持ちかけた。(難民キャンプでは)難民(世帯)40戸に1人の中間層リーダー (*Maji*) を置き、その上に、また別のリーダーを置く、というようにキャンプ長までずっと(階層的に)なっていた⁸⁴。彼らは警官たちとは非常に激しく対立していた。時々実弾の応酬にまでなったし、ある時には両者の銃撃の間に挟まれて怖い思いをしたことさえあったよ⁸⁵。

-
- 80 ICDDR,B (International Centre for Diarrheal Disease Research, Bangladesh) はダッカに本部を置く、下痢疾患研究のための国際組織。下痢疾患と看板を掲げているが、守備範囲は非常に広く、保健衛生から人口学・疫学研究まで様々な部門を擁するだけでなく、それらの研究の実地調査のために、バングラデシュ国内の数箇所で大規模な人口学・疫学調査プロジェクトを長期間に渡って実施している。テクナフにある土地はそれらのプロジェクトのための用地の1つであろう。
- 81 AMDA (Association of Medical Doctors of Asia) は、1984年設立の岡山市に本部を置く NGO・国際医療ボランティア組織。
- 82 AMDA の HP (<http://amda.or.jp/content/content0047.heml>) によれば、「1992年3月、ミャンマー軍事政権が分離独立を求める少数民族を迫害。イスラム系ロヒンギャ族等20万人が難民となってバングラデシュに流出した。日本・ネパール・バングラデシュにより AMDA 多国籍医師団を編成し、ロヒンギャ難民キャンプ内での医療サービス、保健衛生教育を実施」と記されている。しかし、その活動は、サイフルの言によれば、さほど評価すべきものではなかったようだ。
- 83 チッタゴン方言はロヒンガの言葉と非常に近い。筆者(高田)自身が聞いた経験の範囲で言えば、彼らの言葉は、コックスバザールからテクナフ周辺で話されている南部チッタゴン方言と限りなく類似している印象を受けた。ビルマ軍政府側であると民主化勢力側であるとを問わず、ロヒンガに批判的な立場を取るビルマ国内外の人びとは、ロヒンガが元々はバングラデシュ側から流入してきたムスリムであると主張する根拠の一つとして、この言語上の類似を挙げる。
- 84 この *Maji* を媒介とする「自治」システムは、難民たちの間でも不満が多いようで、AHMED ed. [2010] に収載された難民の語りの中で、いくつもの怨嗟の声が聞こえる。
- 85 難民たちと警官たちとの対立の原因をサイフルは説明をしていない。しかし、以下の語りの中で、難民たちの中には禁止を無視してキャンプ外に出て働き現金収入を得ようとする者がいたことや、配給物資の一部を売って現金に換えようとする動きがあったことが触れられている。それらの行為を阻止しようとする警官側と難民たちとの間に軋轢が生じたことは容易に想像がつく。

1993年6月頃、政府は難民帰還のために（送還までの一時滞在目的の）場所を用意した。早期に難民を送還して重荷を下したかったんだ。UNHCRはそれに強く反対し、そのため一時は（UNHCRの）コックスバザール（＝難民キャンプ）担当者が国外退去にまでなったほどだ。UNHCRは、ビルマ国内の状況改善に向けてビルマ政府に圧力をかけるためにも、難民をそのため（＝ビルマ政府との交渉のため）のカードにしたかったようだね。そこに当時のUNHCR代表だった緒方貞子氏が視察に来て、政治的判断をしたことで（バングラデシュ政府とUNHCRとの）膠着した対立状況は改善した。結局、帰還予定難民をそれぞれのキャンプから一時滞在キャンプ（Transit Camp）2カ所に集め、そこから徐々に帰還が始まったが、なかなか帰還（作業）は進まなかった。

ロヒングの女性たちは極めて勤勉で、男性たちは大変な怠け者だったね。キャンプでは女性たちが必死に働いているのに、男性のほとんどは何もせずボーっとしていた。元々彼等の間では重婚も普通（のことだった）。女性の側もそれにはこだわらない。この男はエネルギー（＝精力）が強いから妻が沢山いることが必要なんだ、と女性の側が説明していた。ただし、女性はものすごく強かったよ。男性が言ったことに強く反論したり、男性をしかりつけたりしていた。子供たちが死に慣れていたのも印象に残っている。母親が死んでも、泣きもせず、表情も変えずに黙ってそれを受け入れていた。これには非常に驚いたよ。ロヒングの野生利用知識・技術は大変優れていたね。その辺りにある木などを使ってすぐにイスでもテーブルでも作った。また、彼らは非常にタバコが好きだった。難民となって逃げてくる際にも刻んだタバコを入れた袋だけは一種の財産のようにして、ビニール袋に500g、1kgと入れたタバコをしっかりと持ってきて、いつもふかしていた。女性も男性と同じようにいつも吸っていたな。

彼等には労働許可証がなかったから、（本来なら労働目的で）キャンプの外には出られないことになっていた。しかし、彼等には配給物資しかないからそれ以外に必要なものは現金で入手するしかない。その現金を稼ぐために彼等の多くはキャンプ外で働いた。他方、彼等が労働許可証を持たないことを逆手に取り、彼等をその周辺の当時の平均的日当（60タカ程度）の半分、30タカで働かせるエージェントが難民の中から出てきた。エージェントは儲けの中から1人当たり2タカ程度の賄賂を見張りの警官に渡してキャンプ外労働に目こぼししてもらっていた。以前からテクナフ側に知り合いがいた難民が両者（地元の人＝雇用者側と難民＝被雇用者側）をつなぐ仲介者となり、話をまとめて外の世界に送り出して利益を得ていたんだ⁸⁶。もちろん、地元の有力者がその一味の中に入っている⁸⁷。また、彼ら（＝キャンプ

86 ここでは基本的に当日中に戻る方式が言及されている。しかし、難民たちの側でも自分たちが安く働かされていることを承知している。そのため、機会があるとエージェントや雇用主の目を盗み、コックスバザール、さらにはチッタゴンに長期間出稼ぎに行く者や、そのままそれらの都市近辺で

内の労働者手配エージェント)は稼ぎが無い人たちが配給の米の一部を売って現金化しようとする際にもブローカーとして動いた⁸⁸。

結局、現地での活動が落ち着き、一通りのシステムが出来て緊急事態が終了したと判断したのは1993年9月頃だった。それでダッカに戻り、その後、通常の業務に復帰したんだ。ただし、現地での活動はその後にも継続された。(すでに、自分=サイフルたちの働きで)システムができたので、(後は)現場の人に任せただよ。

この後、1994年から1996年にかけての記憶が明確でなく、もしかすると1995年から1997年だったかもしれないが、いや、やはり1994年から始まったような気がするな、(ジャマルプールでの活動の延長で)「洪水に取り組む」(“Coping with flood”)として(洪水対応のための)人々の伝来の知識を探ることを(日常の)活動の一環で行った。それを2枚程度の簡単なメモ書きにまとめて上司に提出したが、それがレポート等の形にまとまることはなかった。今ではそのメモもどうなったか不明だがね。手元に残しておけば良かったと思うよ。

(続く)

仕事を心得て定着する者も現れるようになる。こうして多数の難民が、キャンプから失踪し、バングラデシュ南東部の都市内外で暮らしていることは、数々の新聞報道から断片的に得られる情報で確認できるが、その数は定かではない。

87 この種の違法行為は、個々に見れば極めて小さなものでしかないが、それを積み重ねれば巨額の資金が動くことになる。例えば、ここで言及されているように本来労働者1人当たり60タカである日当を30タカで働かせた場合、実際には50タカでエージェントが請け負い、働いた人に30タカ渡す、すなわち20タカをピンはねするような形を取る。仮に労働者100人を動かした場合、エージェントには1日で(20×100=)2,000タカ、そのまま月換算にすれば(2,000×30=)60,000タカの金が入ることになる。先にサイクロン緊急支援活動終了時のボーナスが5,000タカであり、それがサイフルの当時の月給と同等ないしそれ以上であったと考えられることを記したが(註64)、60,000タカはその12倍、当時のサイフルの給与1年分以上に相当する。その上、この種の行為があちこちで行われているため、全体としてはさらに巨額になる。当然、こうした大規模な不正行為は地元の有力者が後ろに控えていなければ実行することは難しい。サイフルは彼の経験から、こうしたカラクリを暗に語っている。ただし、この種の話は、地元ではいわば公然の秘密でしかない。

88 配給物資が過剰な量で配布されているのではない。このような災害被災者支援の場合、食事に関し、一般的には健康な成人が一日に必要なカロリー数を目安とし、それにほぼ相当すると考えられる分量の現地の主食(この場合はコメ)と若干の野菜や油脂等を加えて配給量を決定する。しかし、難民の側では食料等の配給を受けたとしても、それ以外に様々な理由から多少なりとも現金を必要とする。その結果やむを得ず、栄養面では若干の不足が出ることを覚悟してでも、3食分の食料のうち1食分程度の分量を換金に回すことで、必要な現金を確保しようとするのである。こうした一種の支援物資横流しについては、AHMED ed. [2010]の難民自身の語りの中でいくつもの言及がある。

Summary

Disasters in Bangladesh observed by an NGO worker:
Narrative of Saiful (Part 2)

TAKADA Mineo

Part 1 of this study discussed the fact that Bangladesh has been affected by many types of natural disasters, which has resulted in the publication of a large number of disaster studies. Many of these studies or reports are on the “suffering” of people, or the “happenings” of the disasters, but very few pay attention to those people who are participating in disaster-relief activities.

This study focuses on the emergency-relief activity done by one NGO worker, Saiful, as represented in his own narratives. It is therefore within the genre of disaster studies, but employing oral history to create a unique type of NGO study. I shall first of all present a sketch of his career and related activities, and then move on to describe his experience of the relief activities during the deluges of 1987 and 1988.

Here in “Part 2”, I shall continue with Saiful’s narrative. It opens with his experience of relief activity during “Cyclone 1991”. This cyclone was one of the most severe in the history of Bangladesh, and was notorious for the calamity and scale of the damage it caused. The cyclone attacked the southern and south-eastern costal areas of the country, and, according to official figures, about 140,000 lives were lost, some 10 million people were displaced, and the economic loss was estimated at \$1.5 million. At that time Saiful was working for the Save the Children Bangladesh organization in the *char* (lands submerged by river sedimentation) area of Jamalpur, a northern district of Bangladesh. His job there was to promote health care provision and to organize everyday development activities. After the cyclone hit, he received an order from the head office in Dhaka to lead the emergency relief activities in the affected area. Quickly heading to the stricken area, he found horrible scenes of destruction and death, with uncountable corpses everywhere. He set to work immediately, firstly instructing local people to bury all corpses in spare spaces, and secondly arranging for the disposal of animal carcasses, mostly cattle or goats. Next, he recognized the need to obtain necessary materials to build simple huts as temporary shelters. Bamboos and tins were procured from the sur-

rounding areas, and these were distributed to victims of the disaster. Some interesting episodes appear in this part of his narrative.

Saiful now proceeds to another case: the relief activities regarding the Rohingya refugees in 1992. The Rohingyas are Muslim residents of Arakan State in Burma, which borders on the Cox's Bazaar district of Bangladesh. As Muslims in Buddhist Burma, they were opposed and oppressed by the ruling junta, and finally persuaded to take refuge in [to flee to] the Teknaf area, the southern-most area of Bangladesh. Some 260,000 to 270,000 people took shelter in the outskirts of Teknaf city.

As Saiful had performed so well in the relief activity for Cyclone 1991, he had been promoted to be Chief of the Emergency Relief Group of Save the Children Bangladesh. Moving rapidly, he and his team soon reached the part of the Naf river, the borderline between Bangladesh and Burma, where the refugees were crossing. At first he and his team distributed plastic sheets to make instant shelters, then vaccinated all the infants against measles, and after that came a mother-and-child health (MCH) program to ensure the safety of the group. In the course of recounting this narrative, Saiful mentions many impressive events and accidents.

(to be continued)